

ちひろ美術館・東京

美術館だより

No.230

2026.10.15



# 没後70年 茂田井武とパリの画家たち—Parisの破片—<sup>カケラ</sup>

●2026年10月30日(金)～2027年1月31日(日)

主催：ちひろ美術館 協力：茂田井泉、大川美術館、講談社、JULA 出版局、トムズボックス、ミュゼ・モタイ

後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区

夢と記憶の画家といわれる茂田井武(1908-1956)。彼にとって生涯忘れることのない大切な記憶となったのが、青春時代のパリへの旅でした。

## 憧れのパリ

茂田井が小学生だったころの美術教育は、手本を模写する臨画が中心でした。それに飽き足らなかった茂田井は、中学生になると好きな絵を描き始めます。1920年代にあたるこの時期を振り返って、「海外の新興美術の紹介が次々と、未来派、表現派、立体派、野獣派という形の天津波となって押し寄せてきて私達はそれに巻かれてフラフラになった」\*と、語っています。20世紀初頭から、ヨーロッパでは新たな芸術運動が巻き起こり、日本にも文芸誌などによって、最前線の動向が紹介されていました。なかでもパリは芸術の都として世界中の画家たちが憧れ、集った街でした。パブロ・ピ



図1 マリー・ローランサン  
ブリジット・スールデルの肖像  
1923年頃

カソやマリー・ローランサン(図1)、モーリス・ユトリロ(図2)、藤田嗣治、マルク・シャガールらが活躍し、日本からも多くの若い画家たち

が、この時期にパリに渡っています。中学卒業後、美術学校の入試に失敗した茂田井は、居場所を見つけれないまま、パリへの憧れを募らせていきました。



図2 モーリス・ユトリロ モンマルトル 1930年頃  
(大川美術館蔵)

## 欧州放浪中の3冊の画帳

1930年春、21歳の茂田井は鞆ひとつで東京を発ち、働いて旅費を稼ぎながらパリへ渡りました。パリに着いても、他の日本人画学生たちのように、画家たちと交流した記録が茂田井にはほとんどありません。17区のデパルカデール通りにあった日本人クラブの食堂で皿洗い兼給仕として働き、週末には安酒場で飲み明かしたり、紙芝居をつくって近所の子ども

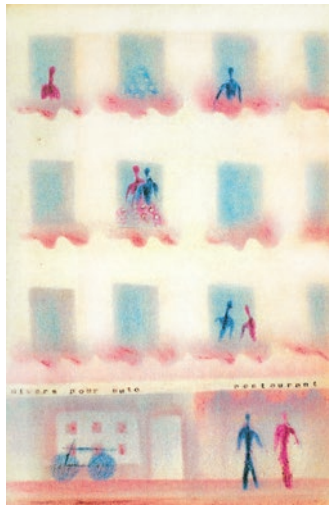


図3 茂田井武 画帳「ton paris」より 1931-33年  
(大川美術館蔵)

たちを喜ばせたりと、街での生活にとけ込んでいきました。美術館よりも、パリ市民に人気のメドラノ・サーカスやグラン・ギニョールの怪奇劇、遊園地のルナパークを好みました。

彼にとっての絵の勉強は、夜ごと記憶を頼りに、小さな画帳に絵を描きためていく、というものでした。およそ3年に渡るヨーロッパ滞在中に描かれた画帳が、3冊現存しています。発表するあてもなく描かれたこれらの画帳からは、ごく私的な記憶を表現するために、さまざまな画材や技法を試みていたことがわかります。

パリに向かう汽車の車中からはじまる「ton paris」(図3)では、目に映るものの全てが新鮮なみずみずしい感性で、デパルカデール通りにあるお店やそこで働く人々の姿をとらえています。パリでの私生活を描いた日記風の画帳「Parisの破片」(図4)では、女性たちや自身の姿、モンパルナスのデュートー街にあったアパートも描かれています。この画帳は1933年にパリに別れを告げてアントワープに発つ場面で終わります。

1932年1月から8月ごろまで、茂田井はジュネーブに長期出張し、翌年春までパリと行き来していました。「続・白い

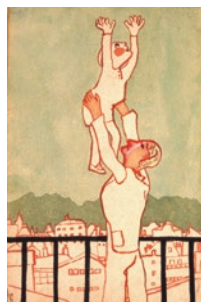


図5 茂田井武 画帳「続・白い十字架」より 1931-35年

十字架」(図5)はスイスでの日々を描いた画帳で、レマン湖畔の陽光あふれる風景や、子どもたちと遊ぶ姿が描かれています。当時、ジュネーブに本部があった国際連盟では、



図4 茂田井武 画帳「Parisの破片」より 1931-35年

軍縮会議が行われていましたが、1933年には日本とドイツが脱退し、再び世界が戦争へ向かうのを止めることができませんでした。この画帳の最後には、戦争で傷ついた兵士の姿が描かれています。

## 記憶のなかの光景

ヨーロッパの旅から戻って10年後、1943年から44年にかけて、茂田井は旅の記憶を小さな折本の画帳「古い旅の絵本」(図6)に描きました。折本の片面には、福岡から京城(ソウル)へと渡り、ハルピンを経てシベリア鉄道に乗り、モスクワ、ワルシャワ、ベルリンなどの街に立ち寄りながらパリに至る行程を見ることができます。裏面にはジュネーブとアントワープに続き、ロンドンから船に乗って、マルセイユ、ナポリ、ポートサイド、スエズと帰路で目にした光景が描かれていて、この旅が世界旅行といえるものだったことがわかります。



図6 茂田井武 画帳「古い旅の絵本」より1943-44年

旅の記憶は、時を経てますます鮮明さを増していきました。第二次世界大戦後、子どもの本に関わるようになってからも、茂田井の絵にはどこか懐かしい異国の街や子どもたちの姿が描かれています。

本展では、同時代のパリの画家たちの作品とともに、世界放浪の旅に焦点をあてて茂田井の作品を紹介します。若い日の世界各地への旅での記憶が、その後の絵に与えた影響についても探ります。

(上島史子)

# ちひろ 旅のたのしみ

●2026年10月30日(金)～2027年1月31日(日)

主催：ちひろ美術館

ちひろにとって、旅は欠かせない楽しみでした。幼いときから両親の郷里である信州で休暇を過ごしたり、女学校の学友たちと登山やスキーをしたりと旅に親しんでいました。画家として活躍するようになってからも、仕事と生活に追われて忙しいなか、時間を見つけては旅に出ました。家族旅行、夫が所属していた事務所の社員旅行、絵本づくりのための取材旅行、写生旅行など多様な旅行の記録があります。

いつも携えていたスケッチブックには、美しい景色や、ゆっくり向き合った家族の姿など、旅先での感動を記しています。アルバムには、撮った場所や日付がちひろ自身の字で細やかに書き添えられた写真も遺されています。

本展ではスケッチと写真に加え、旅で得た実感をもって描かれた作品、旅先から家族へ送ったはがきなども紹介します。

## 季節の移ろいを見つけるー日本の旅

ちひろは四季折々の自然を大切にしていました。秋のスケッチは、紅葉などのひととき鮮やかな部分に着彩が施されたものが多く、ちひろが興味深く眺めていたことがわかります(図1)。



図1 湯沢の紅葉 1969年11月6日



図2 秋草のなかの少女 1969年

カレンダーのために描いた絵のなかで、秋草に目をやる少女には、野にあそぶちひろ自身が投影されているのかもしれない(図2)。

ちひろ一家の冬の楽しみに、スキー旅行がありました。信州を「心のふるさと」と呼び慕っていたちひろは、新婚間もないころ、夫に「どうしてもその信州の雪山の美しさを見せたくなり」大町のスキー場へ足を運びます。息子が生まれてからも、スキー旅行は定番となります。1955年以降は10年近く、正月を小谷温泉のスキー場で過ごしています(図3)。



図3 小谷温泉スキー場にてスケッチをするちひろ 1955年1月

## 憧れの地へーヨーロッパの旅

青春時代から映画館に通い、またアンデルセン童話などの仕事を通して、ちひろはヨーロッパに憧れを抱いていました。

1963年、モスクワで開かれる世界婦人大会に参加するため、日本代表団のひとりとして旧ソビエト連邦に行く機会を得ます。この旅を経て、ちひろのヨーロッパへの思いはいっそう強くなりました。

3年後の1966年、母を伴い、画家仲間とのヨーロッパ旅行に『絵のない絵本』の取材を兼ねて参加します。約1ヵ月間で、アンデルセンの生地オーデンセをはじめパリやローマなどの都市を巡りました。200点にのぼるスケッチを描き、大きな刺激を受けて帰国します(図4)。



図4 オーデンセ アンデルセンの生家 1966年3月30日

アンデルセンの著作をもとにした『絵のない絵本』『にんぎょひめ』などを次々に発表した後、編集者から、ちひろらしい題材の絵本を、と提案を受けます。ちひろはパリが舞台の映画「赤い風船」を絵本にしたいとこたえました。実際にパリを訪れた記憶も新たに制作された絵

本は、街並みの描写や色づかいに、パリの風情がしのべれます(図5)。



図5 街いっばいの風船とバスカル  
『あかいふうせん』(信成社)より 1968年

## ちひろの旅スタイル

1971年5月、『ことりのくるひ』に寄せて書いた文章で、ちひろは春の京都と奈良を訪ねた2泊3日の旅をふり返っています。「山あいの町や村を歩きながら、こういう自由なひとときを、私はどれほどまえから夢見ていたことだろうかと思いました」と、忙しい生活を離れた解放感がつづられています。この旅は、旅先にいた画家仲間・東本つねの電話を受けたその日のうちに新幹線に飛び乗って実現しました。カメラと小さなスケッチブックを手に、思い立ったらすぐに出かける、身軽なスタイルだったようです。

奈良の長谷寺では桜をスケッチしています(図6)。線描は枝振りのみ、花は色のにじみで印象をつかむ潔い画面づくりは、ちひろ晩年の特徴です。自らシャッターを切った写真(図7)は木が中心に据えられており、ちひろの絵によく見られる、子どもたちの前景に草花を大きく配した構図と重なります。



図6 長谷寺の桜 1971年4月3日



図7 長谷寺にて 1971年4月

取材旅行だけでなく、家族や友人との旅も、ちひろの画業と深く結びついていったことがうかがえます。(藤澤恵)

# 手話通訳つき対話型ギャラリートーク

●2026年1月24日(土)、4月4日(土)、6月6日(土)

ちひろ美術館・東京では、手話を主なコミュニケーション手段とする方のほか、どなたでも参加できるプログラムとして、2023年から手話通訳つきのギャラリートークに取り組み始めました。これまで、手話通訳者や参加者の意見をもとに、試行錯誤を重ねてきました。

今年は手話通訳を交えて、対話をしながら作品鑑賞をするプログラムに挑戦しました。開催前には、手話通訳者と打ち合わせを行い、鑑賞する作品や立つ位置を決めておきます。対話を始める際は、誰が話すのかわかるように手で示した後、復唱を交えて、ゆっくり対話を進めます。1回目は要約筆記者も参加していたので、筆記のペースにも配慮しました。その結果、対話の時間は限られたものになり、対話をうながす質問を入れるなどの工夫が必要だと感じました。

2回目は、12名の方が参加しました。

作品の解説をする際、人名や固有名詞などがわかりやすいように写真入りのパネルも用意しました。最初に作品を見る時間を設け、参加者全員が作品を近くでじっくり見てから対話を始めます。なかには、前に出て作品を近くで見ることを遠慮される方も見受けられました。なるべく多くの方に参加していただきたいという思いがあり、定員を15名ほどにしましたが、対話を深めるには、もう少し人数を絞った方がよいことがわかりました。

手話通訳者とも相談して、3回目は2グループに分かれて行うことにしました。また、作品を見る前に、別室で着席して参加者の緊張をほぐす時間をつくりました。絵を見ると、最初にどこに注目するかなどの意見交換をして、絵を見るうえで「正解はない」ということを共有してから展示室に向かいました。

展示室では和やかな雰囲気に対話がう

助成：アーツカウンシル東京



まれました。例えば、1946年に描かれたいわさきちひろの自画像の前に、「ちひろさんはやさしい人だったと思うが、この激しいタッチから、芯は強い人だったと思う」などの意見も出ました。ひとつの作品を見て対話するのに設けた10分間は、あっという間に過ぎていきました。作品を見終えた後は、再び別室で着席をして、解説の補足をし、振り返りの時間を持ちました。まだ反省点もありますが、今後もみなさんとともにちひろ美術館らしいプログラムに育てていきたいと思っています。(原島恵)

# 武田美穂ワークショップ「ひみつきち迷路をつくろう！」

●2026年8月9日(日)、9月12日(土)

武田美穂展に関連し、ワークショップ「ひみつきち迷路をつくろう！」を開催しました。そのようすを報告します。

## つくる日

会場の多目的展示室に参加者が来る前に、武田美穂さんは、ささっと「プリミティブに」文字や絵を描き、それらが切り取られて貼られ、少しさびしかった壁が楽しくなりました。迷路をかざるための、さまざまな雑誌の切り抜きや、布、リボン、モールなど、材料が会場の机の上に並べられ、武田さん自身もキャリーケース2台分もの、材料や道具(マーカーやテープ、シール、布等)を持ってきて下さいました。材料を見るだけで、わくわく。

いよいよワークショップ開始。まず武田さんが2冊の自作絵本『ありんこぐんだんわははははは』(ポプラ社)、と『オムライス ハイ!』(ほるぷ出版)を読み聞かせしました。参加型の内容と、ラップ調のリズムに子どもたちはもちろん、周りで見学している大人たちも一気に絵本の世界に、へい!



さあ、いよいよ迷路づくり。子どもたちは気に入ったダンボール箱をそれぞれ

取っていきます。どうしても出口をつくりたい子、入り口をつくるという子、自分のつくる部分を、どこかにつなげようとする子、にわかに会場がにぎやかになり、ダンボールをせまい会場が埋め尽くします。



ワークショップには、小学生から、中学生までが参加し、各自工夫をして糸でんわを取りつけたり、途中をプラネタリウムにしたり、とダンボールが個性的な「ひみつきち迷路」に変化していきます。武田さんは慣れた手つきでカッターで窓をあけたり、子どもたちの声を聞いたりし、最初は何もなかった場所に、どんどんと迷路ができあがっていきます。編集者の方も2名手伝いに加わり、子どもと大人があちこちにいたりきたり。

途中、休憩をはさんで、できあがったところで、武田さんが制作者にインタビュー：「えー、放送席、放送席ー。」



自作の解説をする子どもたちに、武田さんもみんなも、へー!できた迷路に入って遊び、最後に集合写真を撮りました。



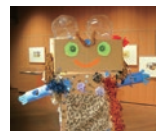
## とりこわしの日

子どもたちがつくったものは、大人が勝手に片付けるのではなく、つくった子どもたち自身の手でこわす、という武田さんの考えにより、迷路をこわす日を決めました。

9月12日、迷路をつくった子どもを中心に11名が集まりました。最初に参加型の絵本で「声出し」をした後、迷路で遊ぶ最後の時間。武田さんが子どもたちに感想を聞くと、「なかは暗くておもしろ



かった」などの意見が。その後、紙吹雪を皆で放り投げ、武田さん手描きの絵つきの軍手をはめて、基地迷路はこわされ、あっという間に展示室はすっきり。残るのはひみつきちめいろロボだけでした。(松方路子)



## ひとこと ふたこと みこと



7月25日(土)

戦争中の、色のない無言で語る少女。戦後の、救われるようなちひろカラーの、天使のような子ども。今の時代の子どもたちは、どうえがかれるだろう。ちひろの子どもたちは、私たちのみちしるべだと思いました。

7月29日(水)

今日も暑い日ですが、うれしいことに孫とふたりで来られました。ちひろさんの絵に癒されます。世界のあちこちで戦争をしていて、終わりません。ここにある絵のなかの子どもたちのような心、みんな大人になったらなくなってしまったのでしょうか。世の中の平和を、いつもいつも祈っています。

Kyoko I

8月2日(日)

娘と来ました。私の大好きな、そしてちひろさんの絵によく似た娘です。娘は、『ねんどのかみさま』を熱心に読んでいました。大人も考えさせられる話でした。娘は一言、「こわされちゃったんだ」といいました。どうか、今後も平和な世界が、日本がこわされることがありませんようにと願い、祈るばかりです。 つねおか

8月4日(火)

自由研究のために来ました。絵の下に絵があって、くすっと笑ったりしました。家で「別に行かなくてもいい」と思った自分に、「おもしろいから行ってみ」といいたくなりました。メモをとるのも忘れるほど楽しかったです。私も絵を描いているので、すごく勉強になります。クラスのみんなにいつ

ぱいじまします。五味陽咲(10)  
8月20日(木)  
母に連れられて来館しました。社会人になってからちょうど5か月ほど。毎日慣れないことやできないことがたくさん出てきて、辛いながらも食らいつきながら頑張っている日々でしたが、ここに来て、不思議と心があたたかくなりました。近所なので、必ずまた来ます！ちひろさん、元気をくれてありがとう。また明日から、頑張ります。

9月2日(水)

しずかな時間でした。がんこちゃんのキャラクターが生まれたのがこの方からだったと知りませんでした。ちひろさんも武田さんも、とても子どもをいとおしく思っていると伝わりました。 michike

## 美術館 日記



7月25日(土) ☀️/☂️

本日より「武田美穂展 絵本づくりはドキドキなのだ！」が始まる。ショップにも関連絵本やグッズがならび、明るくにぎやかな雰囲気。

8月9日(日) ☀️/☂️

武田美穂ワークショップ「ひみつきち迷路をつくろう！」を開催。展示室4の中央には参加した子どもたちが段ボールでつくった迷路が出現。迷路を飾るパーティーモールが照明の光にキラキラと輝き、見ていだけでワクワクする空間ができあがった。(活動報告 p. 4)

8月16日(日) ☀️/☂️

武田美穂さんと当館学芸員によるギャラリートーク初回。展示室4中央の迷路を囲むように、部屋いっぱいにお客さまが集まる。武田さんご本人による臨場感ある絵本

の読み聞かせを始め、いきいきとした作品の説明など活気あるトークが展開された。終了後のサイン会も、2階会場から1階まで行列ができる盛況ぶり。ひとりひとりと笑顔でことばを交わし、ときには写真撮影のリクエストにも応じながらサインをされる武田さんの姿に、絵本への情熱と読者の方々への大きな愛を感じる。

8月19日(水) ☀️



朝から盛んにセミが鳴いている。カフェテラスの端に置いた朝顔も大輪の花を咲かせている。しばらく落ち着いた気温も数日前より上がり、まだまだ夏を感じさせ

る暑さ。しかし暦の上ではすでに立秋。駐車場で開館の準備をしていると、一匹のトンボが目の前を横切った。

8月22日(土) ☀️/☂️

ナイトミュージアム開催。通常より開館を3時間延長し夜8時に閉館。

夕方からは、“ちょっとこわい絵本のじかん” “すごくこわい絵本のじかん”も。来館者は昼間とは違う日没後の美術館の雰囲気を楽しまれたようす。絵本カフェでは本日の特別メニュー、武田美穂さんの作品イメージが楽しめるホットケーキを提供し、好評をいただく。



## 風

Vol.17

旬なできごとをピックアップしてお届けします

「小さい子どもがきゅっとさわるでしょ、あの握力の強さはとてもうれしいですね。(中略) ターッと走ってきてパタッと飛びついてくるでしょ、あの感じなんてすてきです」(対談「子どもを描きつづけて」より、1972年)

「おとなというものはどんなに苦勞が多くても、自分の方から人を愛していける人間になることなのだと思います。」(「おとなになること」より、1972年)

いわさきちひろが自分の考えを自身のことばでつづり、新聞や雑誌で発表したり取材を受けたりした記事は、当館にたくさん残されています。これまでも折々の展覧会や書籍などで部分的に紹介して

きましたが、実はその全貌をまだ明らかにできていませんでした。一度紹介されると繰り返し光が当たることばがある一方で、紹介される機会が少なかったり、特定の一節にのみ注目が集まり、前後との文脈が知られずにきたことばも少なくありません。そこで、現在当館で把握しているすべてのちひろのことばを整理分類、デジタル化しデータベース化するとともに、目録\*にまとめることとなりました。

雑誌や新聞などで公開されたことばは、できるだけ初出の記事あるいは原文のまま全文を目録に収録しています。そのほか、家族に宛てた手紙、仕事の構想や予定などを書き留めた手帳、日記など

の手稿を含めると、ちひろのことばは全部で269点が確認できました。そのうち最も古いのは、小学校4年生のときの作文(1929年)、最も新しいのは、亡くなる4ヶ月前に、入院中の病室で書かれた書簡(1974年4月6日)です。

1918(大正7)年生まれのちひろは、1950年代前半ごろまでは旧漢字や旧仮名遣いも多用しています。本目録では、時代背景も伝えるため原文を尊重して翻字\*\*しましたが、ふりがなも振って読みやすくしました。

ことばから人物像を感じ取ることものできるこの目録を、ぜひ手に取っていただければ幸いです。

(中平洋子)

ちひろ美術館・東京イベント予定 各イベントのご予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント担当へ。

掲載内容は予告なく変更する場合があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。

TEL.03-3995-0612 chihiro.jp



### 〈展覧会関連イベント〉

#### ●「茂田井武とパリの画家たち」関連企画 学芸員によるスライドトーク

○日時：11月22日（日）14：00～15：00  
○参加費：無料（入館料別）  
○定員：30名  
○申し込み：要事前予約（10/22より公式サイト、TEL.）  
展示担当の学芸員が、スライドを用いてわかりやすくお話しします。

#### ●松本猛ギャラリートーク

○日時：11月29日（日）14：00～15：00  
○参加費：無料（入館料別）  
○申し込み：不要  
いわさきちひろのひとり息子・松本猛によるギャラリートーク。展示作品を見ながら、母・ちひろとの思い出や展示の見どころなどをお話しします。

#### ●「ちひろ 旅のたのしみ」関連企画 ちひろの水彩技法体験 にじみの絵はがきをつくろう

○日時：1月5日（火）、6日（水）10：30～15：30  
○参加費：500円（入館料別）  
○対象：5歳以上  
○定員：各日50名（先着順）  
○申し込み：当日10時より受付  
いわさきちひろが得意としていた水彩技法の「にじみ」を体験し、世界に1枚の絵はがきを作ります。



#### ●高橋明也講演会 「茂田井武と両大戦間のパリ」

○日時：2027年1月9日（土）14：00～15：30  
○講師：高橋明也（東京都美術館館長）  
○参加費：会場1000円（入館料別） オンライン700円  
○定員：会場40名 オンライン100名  
○申し込み：要事前予約（12/9より公式サイト、TEL.）  
1920年代から30年代にかけてのパリは、世界各地から芸術家が集い、芸術の中心地として活況を呈していました。フランス近代美術を専門とする高橋明也さんに、茂田井武が渡った時代のパリについてお話をうかがいます。



#### ●ギャラリートーク

○日時：第1・3土曜日 14：00～14：30  
展示会の見どころや展示作品について担当学芸員が解説します。  
○申し込み：不要



いわさきちひろ  
猫を見つめる男の子の横顔 1960年代

### 〈会期中のイベント〉

#### ●障がいのある方のための特別鑑賞日

○日時：11月16日（月）10：30～15：30  
○参加費：無料（入館料別\*18歳以下の方、障害者手帳をご提示の方と介添えの方1名は無料）  
○対象：障がいのある方とその介助者、通常の来館に不安を感じている方  
○申し込み：要事前予約（10/16より公式サイト、TEL.）  
障がいのある方や来館に不安のある方が安心して鑑賞できるように休館日に開催する鑑賞日です。詳細は公式サイトをご覧ください。

#### ●「いい育児の日 11月19日」関連イベント

協力：NPO 法人手をつなご

##### ・出張 子育てのひろば

○日時：11月19日（木）10：00～15：00  
○参加費：無料（入館料別） ○申し込み：不要  
経験豊富な保育の専門スタッフがお待ちしております。子育ての相談をしたり、親子で遊んだり、保護者同士の交流の場にもなっています。ぜひ自由にお楽しみください。  
※託児はありませんので、お子さんといっしょにご参加ください。

##### ・ファーストミュージアムデー あかちゃんと美術館に行こう！

○日時：11月19日（木）  
10：30～11：15／13：30～14：15  
○参加費：無料（入館料別）  
○対象：0～3歳児と保護者  
○定員：各回5組10名  
○申し込み：要事前予約  
（10/19より公式サイト、TEL.）  
あかちゃんといっしょに、展覧会や館内を親子で楽しみましょう。



いわさきちひろ  
遊ぶ子どもとあかちゃん 1967年

#### ●わらべうたあそび

○日時：12月5日（土）11：00～11：40  
○講師：服部雅子（西東京市もぐらの会代表、はとさん文庫主宰）  
○参加費：500円（入館料別）  
○対象：0～2歳児と保護者 ○定員：10組20名  
○申し込み：要事前予約（11/5より公式サイト、TEL.）

#### ●ちひろの誕生日

誕生日当日の12月15日（火）は、ご来館のみなさまに、ちひろのことばカード（非売品）をプレゼントします。

#### ●成人の日特典

2027年1月3日（日）～1月11日（月・祝）まで、新成人の方は無料でご入館いただけます。

#### ●絵本のじかん

○日時：第2・4土曜日 11：00～11：30  
○参加費：無料（入館料別） ○申し込み：不要  
協力：NCBN（ねりま子どもと本ネットワーク）  
季節や展示にあわせ、毎回テーマにそった絵本の読み聞かせを行います。あかちゃんから大人まで、どなたでもご参加いただけます。

CONTENTS <展示紹介> 没後70年 茂田井武とパリの画家たちー Parisの破片（カケラ）ー…②／ちひろ 旅のたのしみ…③／<活動報告> 手話通訳つき対話型ギャラリートーク、武田美穂ワークショップ報告…④／ひとことふたことみこと／美術館日記／風…⑤

美術館だより NO.230 発行2026年10月15日



ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井 4-7-2 TEL.03-3995-0612 テレホンガイド 03-3995-3001 FAX 03-3995-0680